

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開2002-333434

(P2002-333434A)

(43)公開日 平成14年11月22日 (2002.11.22)

(51)Int.Cl. <sup>7</sup>	識別記号	F I	テ-ル-1 <sup>7</sup> (参考)
G 01 N 29/02		G 01 N 29/02	2 G 0 4 7
A 61 M 1/36	5 2 0	A 61 M 1/36	5 2 0 4 C 0 6 6
5/00	3 3 3	5/00	3 3 3 4 C 0 7 7
G 01 N 29/20		G 01 N 29/20	

審査請求 未請求 請求項の数 9 OL (全 5 頁)

(21)出願番号	特願2002-42874(P2002-42874)	(71)出願人	000003159 東レ株式会社 東京都中央区日本橋富町2丁目2番1号
(22)出願日	平成14年2月20日 (2002.2.20)	(72)発明者	杉原 岔樹 滋賀県大津市園山1丁目1番1号 東レ株式会社滋賀事業場内
(31)優先権主要番号	特徴2001-44788(P2001-44788)	(72)発明者	田村 信弘 静岡県沼津市足高字尾上405-65番地 東レ・メディカル株式会社静岡工場内
(32)優先日	平成13年2月21日 (2001.2.21)		
(33)優先権主張国	日本 (JP)		

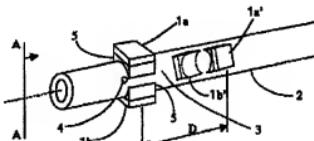
最終頁に説く

(54)【発明の名稱】 気泡検出方法および装置

(57)【要約】

【課題】気泡検出のために断面形状を変形することが困難な液体輸送管中を流れる液体であっても、その中の気泡の存在を比較的容易に検出できる気泡検出方法および装置を提供する。

【解決手段】液体が流れる液体輸送管の側面から超音波を前記液体に対して送信し、前記液体を通して超音波を受信し、受信した超音波に基づいて前記液体中の気泡を検出する気泡検出方法であって、前記液体輸送管の液体の流動方向に離れたnか所 (n : 2以上の整数) の検出位置において超音波送受信を行ふことを特徴とする気泡検出方法。



## 【特許請求の範囲】

【請求項1】液体が流れる液体輸送管の側面から超音波を前記液体に対して送信し、前記液体を通過した超音波を受信し、受信した超音波に基づいて前記液体中の気泡を検出する気泡検出方法であって、前記液体輸送管の液体の流動方向に離れたnか所(n:2以上の整数)の検出位置において超音波送信を行うことを特徴とする気泡検出方法。

【請求項2】前記nか所における超音波の送信は液体輸送管の液体の流動方向において、互いにW(m)~V/nN(m)の範囲で離れた送信位置から行うことを特徴とする請求項1記載の気泡検出方法。(ここでW(m)は超音波素子の液体輸送管の液体の流動方向の長さ、V(m/s)は液体輸送管中の液体の流速、N(h/s)は液体輸送管への送液装置の時間あたりの脈動数とする。ただしW<V/Nnとする。)

【請求項3】前記nか所における超音波の送信は液体輸送管の管軸回転方向において互いに異なる送信位置から行うことを特徴とする請求項1または2に記載の気泡検出方法。

【請求項4】前記送信位置を、管軸回転方向において互いに±180°±n度離した位置とすることを特徴とする請求項3に記載の気泡検出方法。

【請求項5】前記nか所において受信した超音波に基づいて得た気泡検出出力のうち、同一気泡に基づく複数の気泡検出出力を单一の最終的な気泡検出出力として出力することを特徴とする請求項1~4のいずれかに記載の気泡検出方法。

【請求項6】液体の流動方向に沿って上流の検出位置において気泡を検出したときに、下流の検出位置において前記検出のD/V(s)の後の後に検出された気泡検出信号を無視することを特徴とする請求項5に記載の気泡検出方法。(ここで、液体輸送管中の液体の流速をV(m/s)、上流および隣接する下流の検出位置の間隔をD(m)とする。)

【請求項7】液体の流動方向に沿って上流の検出位置において気泡を検出したときに、前記検出の時点から前記検出のD/V(s)時間後の前後までの間に下流の検出位置において検出された気泡検出信号を無視することを特徴とする請求項5に記載の気泡検出方法。(ここで、液体輸送管中の液体の流速をV(m/s)、上流および隣接する下流の検出位置の間隔をD(m)とする。)

【請求項8】発信器と受信器からなる複数の対向型超音波素子を有する気泡検出装置であって、前記複数の対向型超音波素子のいずれかで気泡を検出した場合に最終的な気泡検出出力が発生する検出処理装置を有することを特徴とする気泡検出装置。

【請求項9】前記検出処理装置は複数の前記対向型の超音波素子で同一気泡を検出した場合に、單一の最終的な気泡検出出力を出力することであることを特徴とする請求項8

求項8に記載の気泡検出装置。

## 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、液体が流れる液体輸送管中の気泡検出方法およびその装置に関するもので、液体輸送管を対向する二つの超音波素子を複数配置して液体中の気泡を検出する方法および装置に関するもの。

## 【0002】

【従来の技術】液体輸送管中を流れる液体中の気泡検出技術としては、人工透析装置における気泡検出がよく知られている。人工透析装置においては、液体輸送管内に存在する気泡が体内に入ると人命に関わるため、液体輸送管内に気泡が存在するか否かを検出することが必須とされており、この要請に応えるために超音波を用いた気泡検出器が一般的に採用されている。

【0003】この超音波を利用した気泡検出器の原理は図1に示すごとく一方の超音波発信素子1aで発信した超音波が液体輸送管2(通常は、断面円形だが、2つの素子にはされて圧され、略幅円形に変形している)と液体3を通して他の超音波受信素子1bで受信されるようになっており、液体3内に気泡4がある場合は超音波が気泡によって反射して受信する超音波の強度が減少する現象を利用したものである。

## 【0004】

【発明が解決しようとする課題】このような従来の気泡検出技術を用いて、人工透析装置以外の用途に用いることも可能である。しかし、人工透析装置の液体輸送管には容易にその断面形状が変形する堰ビ等の柔軟なチューブが用いられているが、一般的の液体輸送管では金属管や、テフロン(登録商標)管などのように、その断面形状が殆ど変化しない硬質の素材のものも多い。この様な液体輸送管中の気泡を人工透析装置用の気泡検出装置で検査しようとしても、発信側の超音波素子が液体輸送管と密着せず、超音波が管内に入射しないため、気泡を検出できないという問題があった。また、たとえ音響カプラ等を用いて超音波素子と液体輸送管を密着させたとしても、気泡検出範囲は狭く、全ての気泡を検出できなくなる問題があった。

【0005】本発明の目的は、気泡検出のために断面形状を変形することが困難な液体輸送管中を流れる液体であっても、その中の気泡の存在を比較的容易に検出できる気泡検出方法および装置を提供することにある。

## 【0006】

【課題を解決するための手段】上記の問題を解決するための本発明は、液体が流れる液体輸送管の側面から超音波を前記液体に対して送信し、前記液体を通過した超音波を受信し、受信した超音波に基づいて前記液体中の気泡を検出する気泡検出方法であって、前記液体輸送管の液体の流動方向に離れたnか所(n:2以上の整数)の

検出位置において超音波送受信を行うことを特徴とする気泡検出方法である。

【0007】ここで、前記nか所における超音波の送信は液体輸送管の液体の流動方向において、互いにW(m)～V/nN(m)の範囲で離れた送信位置から行うことが好ましい。(ここでW(m)は超音波素子の液体輸送管中の液体の流速、V(m/s)は液体輸送管中の液体の流動方向の長さ、N(回/s)は液体輸送管への送波装置の時間あたりの駆動数とする。ただしW<V/nNとする。)

ここで、前記nか所における超音波の送信は液体輸送管の管軸回転方向において互いに異なる送信位置から行うことが好ましい。

【0008】さらに、前記送信位置を、管軸回転方向においてたがいに略180°/n度離した位置とすることが好ましい。

【0009】また、前記nか所において受信した超音波に基づいて得た気泡検出出力のうち、同一気泡に基づく複数の気泡検出出力を單一の最終的な気泡検出出力をとして出力することが好ましい。

【0010】ここで、液体の流動方向に沿って上流の検出位置において気泡を検出したときに、下流の検出位置において前記検出D/V(s)後の前に検出された気泡検出信号を無視することが好ましい。(ここで、液体輸送管中の液体の流速をV(m/s)、上流および隣接する下流の検出位置の間隔をD(m)とする。)

また、発信器と受信器からなる複数の対向型超音波素子を有する気泡検出装置であって、複数の受信器出力のいずれかで気泡を検出した場合に最終的な気泡検出出力を発生する検出処理装置を有することを特徴とする気泡検出装置である。

【0011】ここで、前記検出処理装置は複数の前記対向型の超音波素子で同一気泡を検出した場合に、單一の最終的な気泡検出出力を出力するものであることを好ましい。

【0012】

「発明の実施の形態」以下、添付図面を参照して、この発明の気泡検出方法および装置の実施の態様を詳細に説明する。

【0013】図2は本発明における複数対の超音波素子配置の、n=2の場合の一実施態様を示す構成図である。超音波発信器1aから発信された超音波は音響カプラ5を介して断面がおむね円形である液体輸送管2中に入射する。この際、液体輸送管2を通過した超音波は1aに対向して配置された超音波受信器1bで受信される。この時液体3中に気泡があると、図1の場合と同じように気泡によって超音波が反射されるため、超音波受信器1bの受信量が低下し気泡が通過したことを検出できる。

【0014】ここで、超音波発信器1a、超音波受信器

1bなどの超音波素子は、水晶、硫酸リチウムなどの圧電結晶や、PVDF(フッ化ビニリデン)、PVDF-TTFE(フッ化ビニリデン-三フッ化エチレン共重合体)などの高分子圧電膜や、PZT(チタン酸ジルコニア鉛)、ジルコン酸鉛などの圧電セラミックで構成されることが好ましい。

【0015】音響カプラ5の材質は特に規定されないが、ポリカーボネートやアクリル樹脂などの樹脂や、シリコングム等のエラストマーが好ましく用いられる。特にエラストマーを用いた場合、測定対象物の表面の凹凸の影響を受けにくく、測定精度を向上できるので好ましい。なかでも、シリコングムが好ましい。

【0016】図2においては、1a、1bの超音波素子対から下流方向に距離D離れた位置に超音波発信器1'a'、超音波受信器1'b'の対が配置されている。1'a'と1'b'による気泡検出原理は1aと1bによるそれと同様である。

【0017】ここで、距離D(m)は、W(m)～V/N(m)の範囲が好ましい。シリジンポンプもしくはチューブポンプのように、送液時の脈動と、脈動時の陰圧による液体輸送管の間隙などからの気泡の混入の周期が重なりやすい送液装置を用いた場合、距離Dがポンプの脈動の間に液体輸送管内を走る距離V/N(m)よりも大きいと、n個の気泡検出が配置されている区間に複数の気泡が一度に通過することになる。そのため後述のような、気泡検出範囲を拡大して気泡のダブルカウントを防止する構成の効果が得られにくい。W(m)よりも小さいと、超音波素子対の配置が困難になるうえ、お互いに干渉を起こすことがある。

【0018】ここで、1aと1bの配置に対して1'a'と1'b'の配置は液体輸送管の断面から見て管軸回転方向において異なる位置にあり、180°/n(nは素子対の数)度回転した位置に配置されている。図2では超音波素子対の数nが2であるため、180°/2=90度だけ回転した位置に配置されている。これら2つの超音波素子対は、検出処理装置6に接続されている。

【0019】図3は図2における超音波素子対の配置状態をA-A断面で示したものである。図3は超音波素子対の数nが2の場合であるが、nが3の場合には同様に第1の超音波素子対に対して180°/3=60度だけ回転した位置に第2の超音波素子対が、120度回転した位置に第3の超音波素子対が配置される。

【0020】これら複数の発信器から発信される超音波の周波数は、ビート信号などのよる検出精度の低下を抑制するため、同一周波数を用いるのが望ましい。また、同一の周波数発信源を用いてこれら複数の発信器を発信させても良い。

【0021】図4は図2における各素子対による気泡検出領域を断面図で示したものである。図4から分かるように、液体輸送管2の断面形状がおむね円形なので、

1aと1bの超音波素子対だけで気泡検出可能な領域は図中斜線部で示した範囲にとどまり、気泡検出不可能な領域が多く残ることになる。これに対し、1a'、1b'の超音波素子対による気泡検出領域を加えることで全体の気泡検出範囲は大幅に拡大できる。

【0022】このように、複数の超音波の送信は液体輸送管の管軸回転方向において互いに異なる送信位置から行うことで気泡の見逃しを大幅に減らすことができる。さらに、送信位置を管軸回転方向においてたがいに約180°/n度離れた位置とすることによって気泡をより高感度に検出することができる。ここで約180°/n度とは、プラスマイナス10%の角度のずれを許容した180°/n±18°/n度の範囲とすることが好ましい。

【0023】ところで、本発明の気泡検出装置は、前記複数の対向型超音波素子のいずれかで気泡を検出した場合に、最終的な気泡検出力を発生する検出処理装置を有するものである。これにより気泡の見逃しを大幅に減らすことができる一方で、一つの気泡を複数の対向型超音波素子で二重に検出してしまう、いわゆるダブルカウントの問題を生じるおそれがある。

【0024】図5は、図2における超音波受信器、1b、1b'の超音波検出信号を示すものである。図4において1a、1bによる気泡検出領域と1b、1b'による気泡検出領域の共通部分で気泡が通過した場合には、図5に示すように1つの気泡が超音波受信器1b、1b'の両方で観測される。

【0025】そこで、複数か所において受信した気泡検出力のうち、同一気泡に基づく複数の検出力を單一の気泡検出力として出力することで、気泡の誤検出をなくすことができる。

【0026】この検出の重複をなくすためには、液体輸送管中の液体の流速をV(m/s)、複数対の超音波振動素子の間隔をD(m)とした時、上流位置での気泡検出からD/V(s)時間後の前後から下流位置で検出された気泡検出信号を無視するよう構成すれば良い。ここでD/V(s)時間後の前後とは、プラスマイナス10%の時間のずれを許容したD/V±0.1×D/V(s)の範囲とすることが好ましい。これによりダブルカウントを防止することができる。

【0027】また、気泡の検出頻度が低い場合には、次のようにしても良い。すなわち、上流位置での気泡検出の時点からD/V(s)時間後の前後までの間に下流位置で検出された気泡検出信号を全て無視するよう構成すれば良い。気泡の検出頻度が低い場合には、これにより効果的にダブルカウントを防止することができる。

【0028】このダブルカウント対策を実施した信号処理装置の構成例を図6に示す。この装置による気泡の重

複検出を防止するための信号処理動作を、図7を用いて説明する。

【0029】受信器1bで気泡を検出すると、受信器1bの気泡検出信号S1i=1はHighからLowに反転する。ここでトリガブルワンショットマルチバイブレータ6を用いることにより、Sig1の立ち下り時に抵抗Rと静電容量Cの組合せで決定される時間t=1/CRの間信号がHighからLOWに反転するパルスSig3を出力する。ここで、C、Rを式により選定する。

【0030】1/CR > D/V  
C、Rを上式により選定することで、受信器1bで検出した気泡が受信器1b'を通過し終えるまでSig3はLowとなる。

【0031】ここで、受信器2が受信器1で検出した気泡を重複して検出した場合、Sig2の反転信号NOT(Sig2)とSig3のNANDをとりSig4を生成する。最終的な気泡検出出力はSig1とSig4のANDをとったSig5として出力される。

【0032】

【発明の効果】本発明の気泡検出方法は、液体輸送管の液体の流動方向に離れたnか所(n:2以上の整数)の送信位置において送信を行って、気泡の見逃しを大幅に減らすことができるという特有の効果を有する。

【図面の簡単な説明】

【図1】気泡検出器の原理図である。

【図2】本発明の複数対の超音波素子による気泡検出の一実施形態を示す構成図。

【図3】複数対の超音波素子の配線の断面図である。

【図4】超音波素子対による気泡検査領域を示す断面図である。

【図5】受信器1b、1b'の気泡検出信号を示したグラフである。

【図6】複数対の超音波素子対による気泡の重複検出を防止するための信号処理装置の一構成例である。

【図7】複数対の超音波素子対による気泡の重複検出を防止するための信号処理動作の一例を示す図である。

【符号の説明】

1a、1a'：超音波発信器

1b、1b'：超音波受信器

2：液体輸送管

2'：液体輸送管

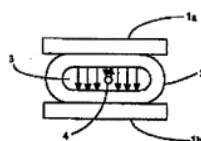
3：液体

4：気泡

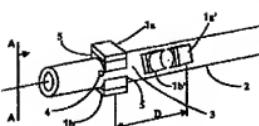
5：音響カプラ

6：トリガブルワンショットマルチバイブルエタ

【図1】



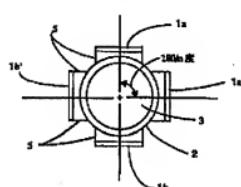
【図2】



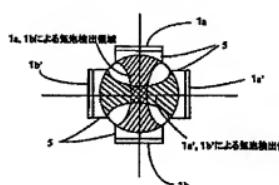
【図5】



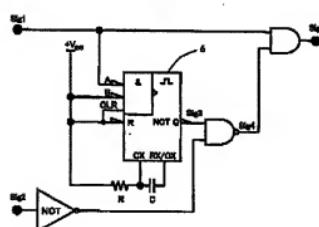
【図3】



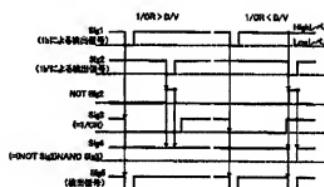
【図4】



【図6】



【図7】



フロントページの続き

Fターム(参考) 2G047 AA04 BA01 BC12 CA01 EA05  
 EA10 GA03 GA13 GG28 GG30  
 4C066 AA07 BB01 CC01 QQ47  
 4C077 AA05 BB01 DD21 EE01 HH03  
 HH07 HH21 KK27